『比較民俗研究』12. 1995／9

菖蒲考

任　東権※

Ⅰ.

菖蒲はサトイモ科の多年草である。根茎が太くて横にのびるし節がある。節のところから細い根がはえる。葉の先は劔のように光っていて，幅は2㎝位で高さは70㎝位までのびる。6・7月ごろには花が咲く。雄しべと雌しべが一つの花の中にあって，黄緑色または青紫色の美しい花が咲く。　菖蒲は冬至からして57日目から，のびはじめるといわれ，菖蒲の芽が出てから，稲作の仕事がはじまる。菖蒲は漢方薬としても重愛され，8月から10月のあいだに採取され，よくあらって乾燥したあと薬材としてもちいる。健胃，鎮静，去痰，驚悸，健忘，咳嗽などに，よく効くと言われている。

また民間では，菖蒲は辟邪の機能が認められて，菖蒲湯で髪をあらったり，菖蒲で酒をつくり飲んだ。菖蒲酒はかおりがあるので香酒として優雅で風流味があった。菖蒲の辟邪の機能は古くから東洋社会でみとめられ，中国，韓国，日本では民俗として広く活用されて伝承してきた。

Ⅱ.

韓国では菖蒲民俗がひろく行われている。東国歳時記[1)]（1840頃）端午の条によると「男女子供たちが，菖蒲湯で顔をあらい，緑色の上衣に紅色のチマ（スカート）を新衣として着る。また，菖蒲の根をかんざしとして，後髪に差すが，両端をきって壽と福の字をきざみ，紅であかくぬって用いる。菖蒲の紅のかんざしは，災厄をはらう辟邪の機能があると，認められているからである。端午の日の菖蒲を用いるこの様な習しを端午粧といった。

陰暦5月5日の端午の日に，このような風俗が伝承されているのは，古い伝統があったからである。菖蒲の根をかんざしとし，菖蒲湯で髪をあらったり，風呂をするのは辟邪を望んだからである。

人々は一生幸福であることを，一番望んでいるが，その幸福にも色々な種類がある。そのなかでもっとも望ましいものは，壽と福である。長生きしても福がないと，苦しい生涯であり，福は多くあっても，短命で早く死んでしまうと，せっかくの福もなにもならない。したがって福にひたされながら，長壽であってほしいものである。このような望みを達成させるために，菖蒲がみとめられたのである。

菖蒲湯とは菖蒲の根と葉を煮たお湯であるが，これで顔を洗い風呂をすると，瘟疾をしりぞけ健康になると，信じたからである。人の美貌や健康，智能，人格などは，先ず顔にあらわれる。

※韓国・中央大学校名誉教授

したがって顔をみて，その印象によって先ず判断したり，評価することが多い。したがって顔を洗って端正をたもち，なお辟邪の機能のある菖蒲湯をつかうのは，あたりまえであった。

韓国の女性は髪の毛は黒くて，みずみずしくてふくよかであることを理想とした。古い唄に「麻束のような，わたしの髪」という言葉がよくつかわれているのは，そのためである。髪がつやつやして色艶のあるのは女のほこりでもあった。ほこりをたもつためには，辟邪の機能のあるといわれる菖蒲が，毎年の年中行事として端午の日には，登場されるようになり，今なお伝承されている。

髪はいつも露出しているので，よごれやすいし，また脂肪質になっているので，汗をながすとにおいを出すことがある。それで清潔にするようにつとめる。菖蒲湯であらい流し辟邪をはかり，浄めた。

6月15日を流頭日と言う。東方にある川に行って髪をあらい，不祥をはらったからである。また流頭日に東の方にのびた桃の木の枝を切って煮て湯水をつくり，髪を洗うこともあるが，東の方角が意識されている。東流や東桃枝は辟邪の機能があった。東は太陽ののぼる方位であるから，まっさきに太陽の光をうけるので陽光の意味があったし，東方から太陽がのぼるので，新生，蘇生，復活の意味がふくまれ，光明の象徴であった。東の方にのびた桃枝の湯は，菖蒲湯に匹敵した。

菖蒲酒にかんする記録は，高麗時代の末期の，牧隠（1328～1395）集，圃隠（1320～1392）集をはじめ，東医宝鑑，林園経済集などにある。したがって七百年前からすでに菖蒲酒があったことがわかる。

菖蒲酒はモチゴメを蒸して麴粉にまぜ，菖蒲の根をしぼった汁をいれてつくった酒である。5・6月頃に菖蒲をほって汁をとって，かもして酒をつくると酒味がよいといわれている。菖蒲は香りたかく美しい花が咲き，生々しくおいしげって，生気と活気にあふれるので，民謡でよくうたわれた。まだ文士達がよく菖蒲を鑑賞しながら話を詠じた。

菖蒲[2)]の田には　金魚がたわむれる
生々と　よくも　たわむれる
　エイヤ　はなしてよ
　はなさんぞ　死んでも
　おれは　はなさんぞ

民謡「楊山道」の一節である。恋人たちを金魚にたとえて，菖蒲のしげみの中で，たわむれる場面をうたった。男女デイトの場所を，菖蒲のしげみにしたのは，仙草，露草，辟邪草としての，認識があったからである。葉は青青と活気にみち，花は香りあってなお美しく咲き，辟邪もしてくれるので，もってこいの場所であった。

Ⅲ.

中国で菖蒲が歳時風俗にあらわれるのは，『荆楚歳時記』にすでにあった。『荆楚歳時記』は梁

の宗懍によって著述されたもので，荆と楚の歳時風俗を記録したものである。宗懍は（AD, 498～502頃）楊子江の中流江陵で生まれ，保定年（561－565）に64歳で卒した。生死の年度が4年のずれはあるが，64歳で死んだのはたしかであるので，晩年の著述をも，6世紀の中頃の著作といえる。

宗懍は江西省の臨汝建成令，広晋などの県令をつとめたことがある。故郷の江陵県令をつとめた頃に湘東王が荆州に，梁を建国してからは，宗懍は重用されて，群書刊定にたずさわり，この頃荆楚歳時も著述されたものと思われる。

『荆楚歳時記』[3]の，5月5日條によると，「浴蘭節とも言う。四民と蹋百草戯があって，ヨモギをとって人形をつくって，門戸の上にかけておくが，悪気をはらうためである。菖蒲をほそくきざむか粉にして，酒にまぜてのむ」といわれている。

菖蒲にかんする記録は，呂氏春秋 巻36 任地篇[4]や，枹朴子などにも記録あって，冬至のすぎたあと，五旬七日たつと芽が出はじめ，百草のなかで早く花が咲くので，冬の寒さに勝ち，人を賢くしてくれ，辟邪や長壽にも効めがあるのみならず，菖蒲の花を食べると，長壽まちがいないと言われている。

端午の日に菖蒲の葉で，小人形をつくって，胡蘆形とよび，これを帯に佩用すると，辟邪によく効くといわれて，子供達が佩用したし，山の谷間に生えた菖蒲をもって，酒をつくると，疫疾をしりぞけると言う。菖蒲はたんなる植物でなく，瘟気をはらい悪鬼をおいはらう，辟邪の霊草として認められていた。

陰暦の五月になると，そろそろ暑くなるので，これからはじまる夏瘦せに勝つためには健康であってほしいので，辟邪が必要であったし，菖蒲が採用されるようになった。

菖蒲については燕京歳時記[5]にも，同じことが書かれてある。「端午の日に菖蒲や艾子を，門のそばにかけておくのは，不祥をはらうためである」とあり，菖蒲の葉は劔状であるので鬼をはらうには，効果があると思ったからであった。このように，中国ではすでに6世紀の荆楚歳時記にはじまり，19世紀の燕京歳時記につながって，今なお民間信仰儀として，伝承されている。

中国では五月を蒲月とよび，端午節を蒲節ともよんで，菖蒲でつくった人形を，蒲人とよんで，菖蒲はひろく愛用された。

梁の国の高祖の誕生[6]は，菖蒲の花とのつながりがあった。すなわち，梁太祖の后の張民は，部屋のなかにいて，にわに菖蒲の花がにわかに咲くのをみた。その花には光彩があってこの世の花ではなかった。后はおどろいて，使者に「花を見たか」とたずねたが，誰も見ていないと答えた。后は菖蒲の花を見たのは富貴の吉兆であると思って，菖蒲の花をつんで食べた。すると后は妊娠して，高祖を生んだといわれている。

菖蒲の花が光彩を放つ奇蹟があったし，また菖蒲の花を食べて，王者になる人物を生む幸運があったわけである。すなわち菖蒲の花が，貴人の誕生につながった説話である。菖蒲は霊草であったので，平凡な使者の目には見えなかったが，高貴な后の目には見えたのである。

Ⅳ.

日本における菖蒲俗は，多様でしかも広範囲であった。8世紀なかばの文献に，すでに記録があり，辞典にも菖蒲打，菖蒲占，菖蒲襲，菖蒲鬘，菖蒲刀，菖蒲帷子，菖蒲兜，菖蒲帷子，菖蒲皮，菖蒲切，菖蒲湯，菖蒲酒，菖蒲鍬形，菖蒲作刀，菖蒲包，菖蒲叩，菖蒲太刀，菖蒲茸，菖蒲浴衣などがあって，菖蒲が生活と密着していた。

聖武天皇天平19年（747）5月5日の節会[7]には，中務と宮内省から献じた菖蒲とヨモギをおいた菖蒲机があったし，騎射をみたが，このときに，参列者たちは菖蒲鬘の下賜があって飾り，菖蒲鬘をしない人は，宮中には入れないように命令した。

平安初期の五月節会[8]には，内外の群臣たちも，皆菖蒲を頭にまいて飾る風俗があった。鎌倉室町時代[9]には，朝庭と幕府では，菖蒲枕があったし，悪鬼や邪気をはらって，無病息災のタブウの方法でもあった。

菖蒲を煮た水で酒をつくり，菖蒲をほそくきざんで酒にいれた菖蒲酒は，香りがあって好まれたし，しゃれて風流味があった。なお邪気まではらってくれるので，端午の日の季節酒，神酒として歓迎された。菖蒲の葉は剱のように先が尖っているので，菖蒲刀，菖蒲太刀とされ，菖蒲でお互いになぐり遊んだので，菖打，菖叩があったし，菖蒲で屋根をふいたので菖蒲茸もできた。

17世紀の古い「日本歳時記[10]」には，つぎのような記録がある。

「端午の日には菖蒲酒をのむ。歳時雑記に午日に菖蒲を切って縷切りしたり，細末にして酒にいれると，陽気をもりあげ長壽するといわれている。山澗九節の菖蒲がもっともこのましい。章簡公の詩にも“菖蒲泛酒堯樽緑”とある。」

昔には薬玉といって，菖蒲，ヨモギ，雑花を十種ほどいれてつくり五色絲でむすんで，群臣たちにわけてやった。世俗に菖蒲湯で風呂をするが，大載礼に“五月五日，蓄蘭為沐浴”とあり，楚辞にも，“浴蘭湯兮沐芳華”とあり，今世に菖蒲湯で沐浴するのは遺風である。

また婦人女子たちが菖蒲を頭上に挿し，腰にまとうが，こうすれば病気を除くと俗にいわれている。歳時雑記に端午の日に，菖蒲とヨモギを刻んで，小さな人形をつくり，また胡蘆のかたちのごとくして，これを帯すると邪気を辟すると記してある。このような遺俗について王沂公が帖子にいわく「明朝知是天中節旋刻菖蒲要辟邪」とあり，また章簡公の詩に「玉燕釵頭艾虚軽」とある。

中国の故事を多く引用してあるが，日本歳時記は韓国の東国歳時記とよくにている。

日本において菖蒲俗は，民間だけでなく宮中でも，伝承されてある。長いあいだ侍従長として，宮中生活をした入江氏の，宮中歳時記[11]には次のような記録がある。五月五日の端午節には，聖武代に群臣たちが，皆菖蒲鬘をかぶるように定めたし，後水尾院当時，年中行事として菖蒲湯に浴したことがあって昭和天皇も端午の日には，ひるは柏餅とチマキをたべ吹上御苑の庭にはえた菖蒲とヨモギをとって束にして風呂のなかに浮かせたあと浴びる菖蒲湯をした。このような点から推して，宮中では今なお，菖蒲湯の遺風が尊重されて伝承されていると言える。

五月五日に京都の賀茂祭があって，沿道の家々では葵を飾ったことから，葵祭りとよばれるよ

うになっが，宮中で葵料理が献立するならわしがあった。奈良の古舗菊水樓では，五月の季節料理として，菖蒲料理を出されたことがあるが，菖蒲で料理したわけではないが，菖蒲葉と根で飾ってあって，香りと色彩があざやかで，華麗さと優雅さが添加されて風流味があった。この菖蒲料理から推して，中世の上流社会でもはやり，今なお伝承されるものと思われた。

今でも端午の日に菖蒲鑑賞会があったり東京の国立劇場の大幕には，菖蒲が描かれてあって，日本伝統文化の一つとして，菖蒲が意識されたことがわかる。

V.

菖蒲浴は東アジアの共通文化であった。韓国でも日本でも，中国の故事にちなんで説明したのをみると，その源は中国であり，韓国，日本へと伝播したことがわかる。

菖蒲は仙草，露草，薬草として認識されてきた。菖蒲を頭髪に飾り，その葉をつかったのは積極的な辟邪であった。生活周辺から悪鬼や邪気をはらう必要があったし，不祥を遠ざけて，幸福にくらしたかったからである。菖蒲の花をたべて，貴人を生む奇続があったのは吉兆の占いでもあった。菖蒲で飾り菖蒲酒をのみ菖蒲湯で浴することによって，健康を保つことにつとめた。また菖蒲で疫疾，瘟疾，夏瘦などに効果があると思ったのは，菖蒲を薬草とみとめたし，また漢方では健胃，鎮静，去痰，咳嗽などに薬材としてつかわれている。

菖蒲が五月五日の端午につながるのは，一年中で陽気の一番旺盛な日に，菖蒲を添わせることによって，辟邪の度を高めるためであったと思う。菖蒲が画によくかかれたり，菖蒲花見の鑑賞があったり，菖蒲料理にまで発展したのは，菖蒲の意味を知った人々の，芸術性と詩情の表現であった。そうすることによって，菖蒲は一層優雅性をまして文化として伝承するようになった。

註

1）東国歳時記　五月端午

男女兜童　取菖蒲湯頡面　皆着紅緑新衣，削菖蒲根作簪　或為壽福字　塗臙脂於其耑遍挿頭髪　以辟瘟号端午粧……今浴蒲　挿菖蓋昉於是

2）任東権編　韓国民謡集　Ⅲ　P. 596

3）荆楚歳時記　五月五日條

四民蹋百草　又有闘百草之戯　採艾以為　人懸門戸上　以禳毒気　端午以菖蒲　或縷或屑　泛酒以辟瘟気

4）呂民春秋

冬至後五旬七日菖蒲始生　菖蒲者百草之　先手是始耕

5）燕京歳時記　五月　端陽條

菖蒲艾子……端午日用菖蒲艾子　挿于門　傍以禳不祥　亦古者艾虚　蒲劒之遺意

6）梁書　太祖張皇后伝

初后嘗於室内　忽見庭前菖蒲生花　花彩照灼　非世中所有　后驚視謂侍者日汝見　対曰不見　后

曰　嘗聞見者富貴　因遽取呑之　是月産高祖
7）続日本書紀　聖武　天平19年　五月條
8）鈴木棠三編　日本年中行事辞典　P. 148
9）風俗辞典 P. 451　東京堂
10）古版本　日本歳時記 P. 86　さつき書房
11）入江相政編　宮中歳時記 P. 122　角川文庫

新刊紹介

任　東権著
『韓・日宮中儀礼の研究』

本書が取り扱う国喪（葬）・大喪（葬）などの宮中儀礼は，韓国・日本を問わず，これまで民俗学からのアプローチの特に少なかった分野であろう。著者は韓国民俗学の第一人者であるが，本書は専ら宮中儀礼に関する文献の内容紹介とその分析が主体となっている。特に日本の宮中儀礼については，昭和天皇の大喪のように内外の大きな関心を呼ぶことはあっても，原則的には外部から遮断された中で行われており，一般にその内実についてはあまり知られていない。そのため，著者は皇室内で行われる儀礼に関わった人との面談も試みているが，それも叶わなかったという。こうした事情から，本書中の日本に関する資料の大部分は宮内庁書陵部において古事類苑・群書類聚などから集められたものである。

本書は，「一，葬儀の歴史」「二，韓国の葬祭と国喪」「三，日本の葬祭と大喪」「四，韓日葬祭儀の比較」「五，日本宮中俗いくつか」の五章により構成される。

一章で人類史的観点から葬儀について簡単に触れた後，二・三章では，韓国と日本の葬祭儀の歴史的変遷について古文献などに見られる事例を紹介しながら論じている。二章では韓国の三国時代以来の葬儀の変遷を追っているが，特に現代に至るまで韓国社会の冠婚葬祭のあり方を規定してきた朱子家礼が，高麗時代から朝鮮時代にかけての国喪に具体的にどのように影響したかが分かる。また，比較的新しい時代の例として，1926年に行われた李氏朝鮮最後の純宗の国喪，皇太子・英親王の妃として日本の皇室から嫁いだ李方子女史の1989年の葬儀内容についても紹介している。三章では，日本の葬祭儀について神・仏・儒それぞれに特徴的な儀礼の形態を紹介した上で，天皇・太皇太后・皇太后・皇后の葬儀としての大喪の変遷と，大喪に伴う諸儀礼について論じている。また，大喪の具体例として，1036年の後一条天皇葬，1867年の孝明天皇葬，大正天皇の大喪などの式次第を紹介している。

四章では葬儀・祭儀（神祭・儒祭）それぞれについて，用語をもとに韓日間の対比表を掲げている。著者は日本の古典に見られる古代の祭儀には韓国の堂祭との共通点があり，親近感さえ覚えると「序言」に記しているが，その意図する宮中儀礼の「韓・日の比較」についての方法論はほとんど展開されていない。しかし，「韓日間の生活史も皇国史観から脱却し，新たな観点から証明されねばならない」と指摘しているように，あえて日本の宮中儀礼を外部から見ようとした意義は大きいであろう。

五章では，日本の皇室における儀礼・歳時習俗について紹介されている。具体的には宮中神である園韓神・竈神の祭祀，皇室で行われてきた四代奉祀，男子が幼児期に女装する慣例，宮中歳時について取り上げている。これらの宮中儀礼の多くは現在も行われているようであるが，一般にはほとんど知られておらず，興味深い内容である。

また，付録の「日本葬喪資料」は，神・仏・儒それぞれの葬儀形式の歴史的変遷を概略的に押さえることができ，参考資料として活用できるものである。　（大山孝正）

B 5 版　405 頁　韓国・中央大学校出版部
1995年 9 月刊　13,000韓国ウォン